八幡小学校

生きる力を支える確かな学力を育むための指導の工夫
― 豊かな言語活動の基盤となる，国語力の向上をめざして ―

Ⅰ 研究の内容

1 研究の必要性

（前略）わが国の学力の現状について見ても，「国際的に見て成績は上位にあるものの，(1)判断力や表現力が十分に身に付いていない。(2)勉強が好きだと思う子どもが少ないなど，学習意欲が必ずしも高くない。(3)学校の授業以外の勉強時間が少ないなど，学習習慣が十分身に付いていない。」などの課題が指摘されている。さらに学力に関連して，「自然体験・生活体験など子どもたちの学びを支える体験が不足し，人やものと関わる力が低下している。」などの課題もあげられている。このように，子どもたちの表現力の未熟さやコミュニケーション能力の低下は，全国的なレベルで見ても重要な課題のひとつとしてとらえることができる。

（中略）本校においても児童の実態調査結果から，課題点のひとつとして「表現力」の不足が見られることが確認され，その後，子どもたちの表現力（聞く・話す力，伝え合う力）を育てる指導の工夫に取り組んできた。「確かな学力」としての基礎・基本の中から，「表現力」を取り上げ，さらに言語による表現（国語力）に絞って研究していくことで，豊かな言語活動を養っていくことが大切である。

2 研究仮説

学習活動において，聞く・話す・伝え合うなどの言語活動を位置づけ，工夫して指導すれば，児童の豊かな表現力や国語力を向上させることができるだろう。

3 研究の内容

(1) 国語力に関する理論研究

(2) 主として国語科を通して，国語力の向上を図るための研究・実践

ア 部会の課題に沿って，国語力向上の取り組みをおこなう

イ 各学年の指導の系統性について研究をおこなう

ウ 授業研究等を通しての検証をおこなう

(3) 言語活動の向上を図るための日々の実践

ア 日々の実践をおこなう

4 ブロックの取り組み（授業実践）

(1) 低学年ブロック

「 お手紙 」 （2年 古屋）

「 三年とうげ 」 （3年 腰巻）

(2) 高学年ブロック

「 インタビュー名人になろう 」 (5年 林)

「 学級討論会をしよう 」 (6年 中村)

Ⅱ 成果と課題

1 成果

・児童の実態調査をもとに，学校課題をはっきりさせ，それをもとに仮説を立てて研究を進めることができた。

・総合教育センターより三井 誠先生(主幹研修主事)を招いて，「国語力」の理論研究をおこなうことができた。国語力に関する理解が深まったことで，さまざまな授業実践や学級での取り組みがおこなわれ，国語力のアップにつながってきている。

2 課題

・国語力の育成に焦点を当てて授業研究等をおこなってきたが，数年の研究では明らかな成果は出ない。今後も実践を続けていきたい。

Ⅲ 成果物

(1) 低学年ブロック(3学年)

■普段の授業での「聞く，話す」の取り組み

うれしい話の聴き方（3年生）

☆レベル1
・話す人の方に体をむける。
・話す人の顔を見る。
・よそ見や手いたずらをしない。
・さいごまで話を聴く。

☆レベル2
・うなずいたり，あいづちをうったりする。
・話す人のじゃまにならないようにときどきしつもんする。

☆レベル3
・メモをとりながら。
・話のだいたいのないようを考えながら。

◎レベル3めざして上手な聴き方をしよう。

1 「聴き方レベル表の作成」

2 題材 うれしい話の聞き方(6月上旬実施)

話を聞く相手の態度の違いからくる不快感と気持ちのよさを対比的に体験する。そのことから，日常的に行動を振り返り，積極的に話を聞く意欲につながると考えられる。

最初に，相手を不愉快にさせる話の聞き方を体験し，下手な聞き方について話し合った。次に聞き手が失礼で下手な聞き方で話を聞いたときの気持ちを体験し，話している自分はどんな気持ちなったのかを話し合った。そして，話し手が不快感を持たない聞き方うれしくなる聞き方を知るようにさせた。実際に上手な聞き方で話を聞いてもらい，話し手の気持ちを体験してみた。最後に，聞き手が上手に聞いてくれたときの気持ちと，下手な聞き方をしたときの気持ちを比べて話し合った。

普段何気なくしている「話を聞く」ということ。きちんと話を聞くことが，話をしている人にとってとてもうれしい気持ちになることを，体験してみて子ども達は理解できたようだ。上手な聞き方は，相手を大切に思う気持ちになることにも気づいた児童が出てきてくれてよかった。

(研究主任 武井茂)